

ことばだより

Vol.1

2021（令和3）年6月

連載

子どもを育てる評価

筑波大学附属小学校教諭
あおきのぶお
青木伸生



1. なんのための評価か

授業をすれば、評価は必要です。従来の評価は、どうしても学期末や学年末の評定のために行われるような傾向があります。評価と評定の区別が曖昧に捉えられていることも少なくありません。評定は、それまでの学習状況の評価を総括するものです。評価は、日々の学習を教師・子どもの両者が行っていくものです。ここでは、評価の目的を確認し、実際の国語教科書にどのようなかたちで示されているかを紹介します。

評価の目的は、大きく二つあります。

- ① 子どもが、自分自身の学習を振り返り、成果や課題を自覚するため。
- ② 教師が、子どもの学習状況を把握し、授業改善に生かすため。

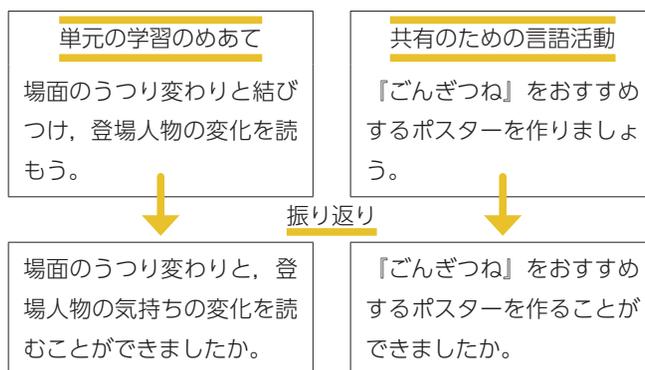
評価というと、子どものためとは言いながら、つい教師が行うものであると捉えてしまいがちです。しかし、学習指導要領にあるように、子どもの「資質・能力の育成に生かす」という目標に基づいて考えると、①の目的がとても大切です。国語教科書『ひろがる言葉』は、学習者である子どもを育てるという考え方で構成されています。言葉の学びを通して、「こんな発見をした」「こんなことができるようになった」という振り返りを、子ども自身ができるようになっていきます。

とはいえ、子どもが自分の学びを適切に振り返るのは、そう簡単なことではありません。『ひろがる言葉』の学習のてびきを有効に活用して、振り返りの活動を継続していくことが大切です。

2. 学習のてびきにある評価

『ひろがる言葉』のてびきには、二つの振り返りの項目が示されています。一つは、「単元とびら」に示した「学習のめあて」と対応し、めあてに向けての自分の日々の学びがどうだったかを振り返るものです。もう一つは、読むことを通して形成された考えを「共有」するための言語活動について、というものです。

四年生の『ごんぎつね』を例にすると、次のようになります。



3. 評価するうえでのポイント

授業を通して、子どもはさまざまな場面で自分の学びを振り返っています。しかし、それはなかなか自覚することができません。そこで、単元の終わりにまとめて振り返りを促すのではなく、毎時間の学びの中で、子どもに自らの学びを意識して振り返らせることが大切です。その積み重ねが、子どもの評価力を高めていくのです。

授業者の教材研究の一助になることを願い、筆者の
媚山政良先生（室蘭工業大学 名誉教授）にお話を伺い
ました。これまでのご自身の体験や、エネルギーにつ
いてのお考え、子どもたちへの願いなどを語っていただ
きました。

（インタビュー：教育出版株式会社 教育研究所北海道分室
主任研究員 川嶋英輝）



媚山先生へのインタビュー（右側が媚山先生）

Q 1 少年時代の雪の思い出を聞かせてください。

A 私が通っていたのは札幌市の小・中学校です。今は統
合されてどちらも残っていませんが、中学校は現在の大
通公園東側に位置する学校でした。

中学校のグラウンドは、近くを流れている豊平川の河
川敷にありました。今もそうですが、河川敷は冬の間、
道路を除雪した雪の堆積場になります。その頃は「雪捨
て場」と呼ばれていました。「捨てられる」は悲しい言
葉です。「捨てられる雪」を「かわいそう」と思う少年

時代でした。

ちなみに、現在、札幌市の雪堆積場には約2,000万
立方メートルの雪が運び込まれます。排雪費用は約200
億円です。2,000万立方メートルは、エジプトのピラ
ミッド約8個分です。それが毎年繰り返し造られている
のですから、「かわいそう」と「もったいない」という
二つの思いを抱いていました。

Q 2 教材文に氷室の記述がありますが、 どのようにして氷室と出会ったのですか。

A 生家は代々大工の家系ですが、私だけは「機械屋」に
なりました。父が毎晩黙々と刃物を研ぐ姿を見て、自分
は大工には向いていないと考え、ジェットエンジンやボ
イラー、ディーゼルエンジンを対象とした研究者の道に
進んだのです。

ボイラーでは、火炎の熱伝達を研究していましたが、
それがなぜ利雪を考えるようになったのかと、よく不思議
がられます。しかし、ボイラーと氷室は温度が高いか
低いかという違いだけで、同じエネルギーの研究という
意味では、相違がないのです。

氷室は、古く『日本書紀』の時代から存在していたこ
とを知っていました。熱関係を研究対象としてきた中
で、氷室もいつか研究に応用できる魅力的な存在だと
思っていたのです。

雪の活用方法は、大きく次の三種類に分けることがで
きます。



氷室小屋（石川県）

- ①氷 室：小屋に雪と野菜を入れて密閉する。低温貯
蔵・保存のはたらき。
- ②雪冷房：冷却倉庫。冷たい空気を循環して、中の米な
どを冷やすはたらき。
- ③雪 山：雪山の中に野菜などが入った部屋を設けて冷
やし保存するはたらき。もしくは冷たい空気
や水をつくり取り出すはたらき。

今では、農産物の低温貯蔵だけではなく、人々の快適
な暮らしをつくる冷房にも雪が活用されています。

Q 3 教材文にこめた願いを教えてください。

A 常に、私は研究者として 22 世紀に迎えるエネルギー問題について考えています。その問題とは、多くの化石エネルギー資源が 2100 年には消費されつくし、枯渇するおそれがあるという深刻な問題です。現在のエネルギーの中心の一つは石油です。省エネルギーという節約により、さしあたり石油は枯渇しなくても、このまま使い続けると、私たちの生活の中では使うことができないほど、高価なものとなってしまいます。消費され減り続ける資源量と採掘経費の高騰が要因です。このような問題があるので、SDGs の目標 7「エネルギーをみんなにそしてクリーンに」が掲げられているのです。

「2100 年問題」は、80 年ほど先のことですが、教室の子どもたちの多くが迎える近未来なのですから、2100 年に生きる子どもたちには、エネルギーについてしっかり考えてほしいと願います。その問題を解決する手段として、エネルギーの自給自足ということを考えて

ほしいのです。

そこで大事になるのが季節間蓄熱という考えです。冬の雪をためて夏に利用する。夏の暑さをためて冬に利用するというです。夏の暑さをためるのは木です。夏の暑さを利用して植物を成長させ、冬に再生可能なバイオマス燃料として利用します。これは完全に持続可能なエネルギーの循環です。冬の雪と夏の熱、相互をうまく利用すると、SDGs の実現につながるのです。

また、エネルギーの地産地消を旨ざすことが必要です。したがって、雪があるということは、非常にラッキーなことなのです。雪があれば夏の冷房にも、農産物など食料の貯蔵にも役に立つ。夏も冬も自分の住むところで採れるエネルギーで暮らすのがよいと考えています。雪の利用に対し、そういった展望と思いが私の根底にあります。

Q 4 雪国ではない地域の子どもたちがこの教材文を学習する時に、意識してほしいことを教えてください。

A 北海道など北国に住む者でさえ、少し前までは誰も雪の価値などを認めていませんでした。雪は捨てるものであって、不要なものだったのです。ですから、雪のない地域で学習する子どもたちには、この教材をきっかけに身のまわりをよく見て、捨てられているもの、あるいは気づかれていないものを発見してもらいたいのです。例えば、乾燥した空気もエネルギーなのです。湿度が低いと、野菜や果物の乾燥と貯蔵が簡単になりますから。

先生がたにもお願いしたいことがあります。雪についてもたくさん教えてほしいのです。子どもは、新しいことを知るとすごく喜びます。身近にないからこそ、雪に

対していいイメージをもつものですが、先生がたには雪の厳しさも伝えてほしいのです。身のまわりの自然は、全てきれいで優しい一面だけではないということを知っておくべきだと思います。そういった環境で、雪国の人たちは生活しており、そこに暮らしのストーリーがあるということを学んでもらうことが大切だと思います。

小学校 5・6 年生は自立に向かう時期です。その時期に、まわりを見る力を育てたい。自分のまわりをよく見て、不思議に思うことや自然への感謝の気持ちをもつことが大切です。そういったものに興味をもつことで、その子の将来の幅が広がってくるのではないのでしょうか。

Q 5 最後に読者のかたがたにメッセージをお願いします。

A 子どもたちの未来は、少ないエネルギーでより豊かに暮らすことが大切になる時代です。そのためにも、身近なエネルギーだけで自立するエネルギーの地産地消を旨ざし、自然との共存を図っていかなければなりません。共存とは、自然と人がギブ&テイクの関係であり、一緒に生きていくということです。しかし、今、私たちは自然と共存しているといえるのでしょうか。自然から一方的に奪い取っているだけではないのでしょうか。私たちが自

然と共存していくために何ができるかを、問いかけたい気持ちがあります。

雪やバイオマスの活用は、エネルギーの地産地消を通し、自然との共存を実現させる第一歩になるものと考えています。『雪は新しいエネルギー』を学習した子どもたちが豊かな地球と未来のために、新たな歩みを見いだしてくれることを願っています。

国語科の授業で使えるデジタル教科書の機能を、具体例とともに紹介していきます！



令和2年度版デジタル教科書特設サイトはこちらから↑↑

「国語マーカー」とは？

「国語マーカー」は、線を引いたマーカーの色ごとに表示／非表示を選択することができる6色のマーカーです。赤色や青色、黄色のマーカーで色分けをしたいとき、普通のマーカーを使うと、ある色に注目するためには他の色を消しゴムで消していかなければなりません。一方、「国語マーカー」を使うと、表示する色を選ぶことができるので、たくさんのマーカーの中から簡単に注目したい色に絞ることができます。



「国語マーカー」の使い方

- ①メニューから「国語マーカー」のアイコンを選ぶ。
- ②どの色の線を引くかを選び、本文に線を引く。
- ③チェックボックスで、どの色を表示／非表示するか選ぶ。

それでは、具体的な使用例を次に示します。

1年下巻の『はたらく じどう車』では、「やくわり」「つくり」「はたらき方」などの観点に気をつけて読ませたいときに、「国語マーカー」で色を分けて線を引くのが効果的です（画面1）。着目させたい観点の色だけを表示させて考えたり、二つの観点を選んで比較したりすることができます（画面2）。

次号では『大造じいさんとがん』における「国語マーカー」の使用例を紹介します。



▲画面1
「やくわり」「つくり」「はたらき方」を全て表示！



▲画面2
「はたらき方」（緑色のマーカー）を非表示。

次号（7月発行予定）に続く。

本誌のデザイン

『小学国語通信 ことばだより』では、デザインに季節ごとの「かさね色目」（平安時代以降の服飾文化に用いられた色彩）をイメージした配色を用いることにいたしました。今回の号では、夏のかさね色目の中から「苗色」を選びました。稲の苗代の淡萌黄色を表すこの配色は、5月～6月の田植えの時期に発行となる今号にぴったり。ぜひ次号のデザインもご覧くださいませ。

小学国語通信 ことばだより Vol.1 2021（令和3）年6月発行

教育出版株式会社 編集部 国語科

〒135-0063 東京都江東区有明3-4-10 TFTビル西館

TEL：03-5579-6278（代表）